

ラハブの信仰の決断

ヨシュア記2章1～24節
2021年6月6日
松田 基子 師

詩編の14篇には、神様が御覧になった人間の姿が記されています。そこには、

「神を知らぬ者は心に言う。

『神などない』と。

人々は腐敗している。

忌むべき行いをする。

善を行う者はいない。」

「主は天から人の子らを見渡し、探される。

目覚めた人、神を求める者はいないかと。」

「だれもかれも背き去った。皆ともに、

汚れている。善を行う者はいない。

ひとりもない。」と。

ここに記されていますように、人間は神様に命を与えられ、この世に送りだされたにも拘わらず、自分の造り主である神様を知ろうともせず、己が腹、つまり、自分を神として、自分の思い、願いに、生きてきました。

そういう人間に対して、神様は、

『ご自身こそ人間の造り主であり、

ご自身に聞き従ってこそ、人間は生きる目的を見出し、幸いな、意義ある人生を、全うする事が出来る』

ことを、呼び掛けられました。

その呼び掛けに応えたのは、アブラハムでした。神様はその子孫のイスラエルの民を、神様に聞き従う生き方をさせるために、彼らをエジプトの奴隷の身から救出して、先祖アブラハムに与えると約束されたカナンの地の入口まで導いて来られました。その間、荒れ野放浪生活40年の間に、神様に信頼することをしなかった第一世代は、ヨシュアとカレブを除いて皆、死に絶え、指導者モーセも、神様によって召されました。今、イスラエルはモーセの従者ヨシュアを指導者として、第二世代によって愈々(いよいよ)約束の地に、足を踏み入れることになりました。

ここで、大事な事は、神様がこれから導き入れられる約束の地と言うのは、人が全くいない、土地というわけではありませんでした。そこには、彼らよりも、約700年前にいた、アブラハムの時代、それ以前から人々が住んでいました。それなのに、神様はその所を約束の地として、お与えになると、言われたのです。

『イスラエルは、その神様の約束を確信して、その地を戦い取って行かなければならない』ということです。

神様は何故そんなひどい事を、イスラエルの民にさせられるのでしょうか。その地は、詩編14篇に記されていますように、

『真の神様を求める事をしないで、自分の欲望にノーマンと言わない偶像を拝み、私利私欲に走り、弱い立場の人を虐げて、奪い取る生き方が横行し、本能的な忌むべき行いが常態化していた世界』
でした。

神様は、そのような罪と悪の世界を一掃して、神様に聞き従う神の国を築かせるために、イスラエルの民をカナンの地に送り込まれるのです。そのイスラエルは、モアブ平野のシティムに長い間宿営していました。神様は新しいリーダー、ヨシュアに、ヨシュア記1章2節で、

「わたしの僕モーセは死んだ。今、あなたはこの民すべてと共に立ってヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの民に与えようとしている土地に行きなさい。モーセに告げたとおり、わたしはあなたたちの足の裏が踏む所をすべてあなたたちに与える。」
と約束されました。

ヨシュアは優れた戦士でもありました。彼は如何にして、神様のこの約束を実現させて行く事が出来るか、それには良き準備が必要である事を知っていました。彼はヨルダン川を渡って最初に勝ち取るべき街、エリコに、街の様子を探るべく、有能で信頼できる若者2人を斥候(せつ

こ)が、即ち、偵察者として密かに送り出しました。エリコはヨルダン川の恵みを受けた肥沃な土地が広がっています。気候は温暖で、農作物を豊かに産する所です。

交通の要衝でもあり、紀元前7千年頃から、城壁を巡らせた都市国家が築かれてきました。エリコは、世界最古の都市国家の一つとされていますが、戦いに依って破壊されると、近くにまた、新しい都市国家が建設されるということを、何度か繰り返してきたことが、考古学から説明されています。ヨシュアの時代も、紀元前1250年頃、立派な城壁に囲まれた都市国家が、そこに営まれていました。

斥候の2人の若者は、ヨルダン川の渡し場を通り、旅人を装い、エリコの城門を潜りました。もう夕暮れです。城壁の内側には、城壁を利用した家が建てられていて、城壁沿いに、家の入口が並んでいました。そこに、当時は、珍しくもない遊女宿がありました。斥候の2人は街の情報集めには好都合と判断して、その宿に入りました。しかし、イスラエル人の攻略の噂は、既に、エリコの住人に聞こえていて、王を始め、住人は皆、警戒していました。そのために2人が遊女宿に入って行くのを見た人が、すぐに、怪しいと思い、王に通報しました。王は人を遣わして、遊女宿の主人ラハブに命じました。2章3節に、

「お前の所に来て、家に入り込んだ者を引き渡せ。彼らは、この辺りを探りに来たのだ。」と言っています。

そこでラハブは慎重に、すぐに戸を開けることはしませんでした。それよりも、若者2人を急いで屋上に上がらせ、亜麻の束の中に、彼らを隠しました。その後、使いの者達に應對していません。彼女は王からの命令であるにも拘わらず、大胆に答えました。4節に、

「確かに、その人たちはわたしのところに来ましたが、わたしはその人たちがどこから来たのか知りませんでした。日が暮れて城門が

閉まるころ、その人たちは出て行きましたが、どこへ行ったのか分かりません。急いで追いかけたら、あるいは追いつけるかもしれません。」と、

ラハブは落ち着いて、王の使い達に應對しました。

ラハブの堂々とした態度に、使いの者達は、その言葉を信じて城門へ急ぎました。その姿を確認したラハブは大急ぎで、屋上に上がりました。ところで、ラハブはどうして、王の命令に背いてまで、イスラエルの若者2人を匿ったのでしょうか。ラハブは、遊女であったという事から、私達は、今日的感覚で、判断しようと思いますが、『ラハブは、人生を真剣に生き抜こうとした女性である』

ということが、これ以後の言動で分かります。ラハブが生きた時代、女性の人権は全く認められてはいませんでした。彼女は好き好んで、遊女の道を選んだのではありません。それは、当時、女性が生活の糧を得る道でありました。

彼女の家族構成がどうなっていたのかは解りませんが、彼女は一家の働き手でありました。遊女の道以外にも、亜麻糸作りで生計を立てていた事が解ります。亜麻は50cmから、1m位の茎を、水に漬けて、乾燥させ、乾燥した亜麻の茎を叩いて繊維を取り出し、糸にして、布に織り上げたそうです。彼女は、追っ手が城門を出た、その後で、二人の若者と話しをしました。

9節に、

「主がこの土地をあなたたちに与えられたこと、またそのことで、わたしたちが恐怖に襲われ、この辺りの住民は皆、おじけづいていることを、わたしは知っています。」と

あります。岩波訳では、

「主は、ヤハウエ」

と固有名詞と呼ばれています。古代の考えでは神は固有名詞と呼ばれ、神々の下に人間が居たのです。戦いは人間の戦いではなくて、神と神との戦いでした。なぜ、エリコの人々は、

イスラエルの神様の前に怖じ気づいているのでしょうか。それは、10節に、

「あなたたちがエジプトを出たとき、あなたたちのために、主(ヤハウエ)が、葦の海の水を干上がらせたことや、あなたたちがヨルダン川の向こうのアモリ人の2人の王に対してしたこと、すなわち、シホンとオグを滅ぼし尽くしたことを、わたしたちは聞いています。」

と言っていますが、ラハブにとって、イスラエルの神様がなされた事は、彼女の神様に対する認識を変えるものでした。

彼女が今まで神として崇めてきた、自分達の神は、大地の稔りが豊かに与えられるように、ただ、自分達の豊かさを求め、どんな生き方をしようと諫めることも無い、ノーを言わない神でした。しかし、イスラエルの神様は、ヤハウエと呼ばれ、全てを存在させられる創造主であり、支配しておられる神様です。その証明にイスラエルの民を、エジプト軍が追い迫り、前方に葦の海が行く手を阻み、逃げ場が無くなったとき、葦の海を干上がらせて道を造り、全イスラエルを渡らせられると、エジプト軍を追跡させ、乾いた海に引き入れた後、再び水を満たし、エジプト軍を全滅させられたのです。

天地万物を存在させ、支配して居られる神様以外に、そのような事は出来ない筈です。また、40年もの間、食べ物の無い荒れ野で、彼らを養い、人間の生き方を教えられたのです。このような神様が居られるとは、その神様が、カナン之地を彼らに与えるために、導いて来られ、既にアモリ人の2人の王シホンとオグを滅ぼされたのです。次は自分達エリコが滅ぼされようとしています。ラハブは自分が、決断すべき時が来ている事を自覚しました。

そして、彼女は11節に、自分の信仰を告白しました。

「あなたたちの神、主(ヤハウエ)こそ、上は天、下は地に至るまで神であられるからです。」

と。信仰と言うのは、自分の存在を賭ける決断

です。集団の中に埋もれていては、信仰の決断は出来ません。ラハブは、自分と家族の命を救うために、エリコの集団と決別しました。そのために、彼女は王の命令に従いませんでした。そして彼女は2人に言いました。

12節に、

「わたしはあなたたちに誠意を示したのですから、あなたたちも、わたしの一族に誠意を示す、と今、主(ヤハウエ)の前でわたしに誓って下さい。父も母も、兄弟姉妹も、更に彼らに連なるすべての者たちも生かし、わたしたちの命を死から救って下さい。」

と懇願しました。

信仰とは、物の豊かさや、自分の願望が叶えられると言う次元のことではありません。そう言うものは、自分が地上を去って行く時には、何一つ持って行く事は出来ません。全てはいつか奪い去られて行きます。どの神様を信じるのか、それは、自分の命を委ねることが出来る、人間の命を握っておられるお方を信じなければ、何の価値もありません。ラハブはその事に気付いた人です。彼女は、自分だけでなく、自分に連なる親族の救いのために、自分の命の危険を犯して、イスラエルの斥候2人を助けました。

2人の斥候も真の神様を信じる者として、14節に、

「あなたたちのために、我々の命をかけよう。もし、我々のことをだれにも漏らさないなら、主(ヤハウエ)がこの土地を我々に与えられるとき、あなたに誠意と真実を示そう。」

と誓いました。

ラハブの家は城壁の側面を利用して建てられていましたから、彼女は2人を窓から綱でつり降ろして、城外へと脱出させました。その上で、思慮深く、16節に、

「追っ手に会わないように、山の方へ行きなさい。3日間はその身に身を隠し、追っ手が引き上げてから帰りなさい。」

と指示を与えました。

2人の斥候も、エリコ攻略時の約束を伝えました。18節から、

「我々を吊り降ろした窓にこの真っ赤なひもを結び付けておきなさい。」

それはラハブの家にあった亜麻の糸を、赤く染色した、より糸であったでしょう。

2つ目は、

「父母、兄弟、一族を一人残らず家に集めておきなさい。」

3つ目は、彼らの中の、

「だれかが、戸口から外に出たならば、血をながすことになっても、その責任は本人にある。」

そして、

「我々のことをだれかに知らせるなら、約束はご破算となる」

と伝えました。ラハブは約束を守る事を決意して、21節に、

「お言葉どおりにいたしましょう。」

と答えました。

2人はラハブの指示通りに、山に3日間止まり、追っ手に見つかる事なく、無事にヨシュアの許(もと)に戻り、24節に、

「主は、あの土地をことごとく、我々の手に渡されました。土地の住民は皆、我々のことでおじけづいています。」

と報告したのでした。

ラハブ一族は、約束の通り、エリコ陥落から救出され、イスラエル信仰共同体に加えられました。そしてラハブ自身は何と、ダビデ、そして、救い主イエス様の祖となる祝福に与るのでした。

ラハブの信仰の決断、彼女は、

『真の神は、天地万物を造り、支配して居られる方であり、そのお方にこそ、自分の全存在を賭けて生きるべき事を決断しました。』

そして、自分ばかりでなく、親族の全てを救いへと導きました。

ヤハウエと呼ばれた、その意味は、

『あるものをあらしめる、創造主なる神様』との意です。このお方こそ、真の神様です。そのお方を信じる事無くして、私達の存在の保証は何処にもありません。ヤハウエと呼ばれる唯一の神様は、

「神は居ない。」

と叫ぶ世界に、御子イエス・キリストを人の世に送り、人類の罪を贖わせ、ご自身への道を開いて、私達を呼んで下さいました。これ程の大きな愛を注いで下さっている神様を、信じ従わなくて、私達の存在の保証を何処に求めることが出来るのでしょうか。私達も集団に埋没するのではなく、イエス・キリストの父なる神様に、自分の全存在を賭けて、信じ従って参りましょう。

お祈りを致します。

天地万物を、そして、私達を造り生かして下さる、創造主なる神様

ご自身に背いていた私達に、イエス・キリストを与えて、イエス様の十字架の贖いによって、私達の存在を永遠に保証して下さい、有難うございます。

イエス・キリストを信じ、ご自身を信じることなくして、私たちの、永遠の存在保証はどこにもありません。

どうぞ、この信仰を最後まで、御国に辿りつくまで貫かせてください。

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。